

令和元年6月28日現在

機関番号：34431

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26380968

研究課題名(和文) 児童養護施設入所児童の愛着の再構築に関する基礎研究 ドールプレイの変化を通して

研究課題名(英文) A study on changes of attachment patterns among institutionalized children in middle-childhood.

研究代表者

谷向 みつえ (Tanimukai, Mitsue)

関西福祉科学大学・心理科学部・教授

研究者番号：20352982

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：児童養護施設入所児童16名のアタッチメントの変化を、Attachment Doll Play Assessmentを用いて2年間の追跡調査をした。安定型、不安定(回避/抵抗)型、混乱型の3段階に分けて、アタッチメントの変化をみたところ、改善が7名、不安定化が3名、変化なしが6名であった。変化の要因は児童にとり特別な存在であるアタッチメント対象の有無であった。これには専門家による心理的ケアも含まれた。また、児童の自己表明の促進もアタッチメントの改善と関連がみられた。一方、虐待やトラウマ的経験とアタッチメントの変化は関連がなく、学校生活のQOLやレジリエンス、トラウマ関連症状と関連がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は施設養護におけるアタッチメントの修正に安定した生活環境や人的環境が効果的であることを標準化されたツールにより証左が得られた点である。また、専門家による心理的ケアがアタッチメントの改善に有効であることが明らかにされ、児童養護施設の職員を含めて、親代替のアタッチメント対象となる大人は子どもの心理的危機に寄り添いながらも、子どもの自己表明を支援するメンタライズ機能を持つことが重要であることが示された。これらの知見は里親や施設養育など今後の社会的養護に資すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This two-year longitudinal study examined changes/unchanges of attachment patterns among institutionalized children. Sixteen children with an average age of 6.1 years at Time 1 participated in this study. According to the three classifications of attachment patterns; secure, insecure (avoidant + ambivalent), and disorganized patterns, seven children changed positively, three changed negatively and six were unchanged. The background investigation revealed that children whose attachment pattern changed positively had a significant adult including a therapist. These adults may function as attachment figures for them. The children whose attachment pattern changed positively also improve their ability to disclose themselves. On the other hand, children's experiences of being abused before institutionalization and/or having traumatic experiences did not relate with their change of attachment patterns, but related with their quality of life and resiliency.

研究分野：臨床心理学

キーワード：アタッチメント 児童期 愛着表象 児童養護施設 縦断研究

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

施設養護を受ける児童は様々な理由で保護者の元を離れ、新しく出会った施設職員のケアを受けて暮らし始める。しかし、多くの子どもは施設入所以前に既に親子関係を軸とするアタッチメント形成が阻害されており、虐待など様々なトラウマ的体験を有することも少なくない。そのため安定型のアタッチメントを形成している子どもは少なく、不安定型や無秩序・混乱型が多いことが明らかにされている（桂田・赤澤・谷向, 2013）。

アタッチメントの発達には、乳児期からの養育者との日々の関わりの積み重ねにより、内的作業モデル（Bowlby, 1973, 1980）と称されるアタッチメント対象に纏わる表象が形成される。発達に伴いアタッチメント対象は養育者から保育者や教師、仲間など複数に広がりを見せ、幼児期後期から児童期にかけて、それら複数のアタッチメント表象が、他者一般に対する表象として統合的に形成されると考えられている（村上, 2014）。即ち、アタッチメントは発達過程において必ずしも連続的、固定的ではなく、新たなアタッチメント対象との出会いや養育環境の変化等により、質的に変化することが示唆されている。また、数々の研究から幼少期のアタッチメントが、種々の社会情緒的コンピテンスの発達の「絶対的基盤」（遠藤, 2017）となり、発達精神病理学の見地から後の精神的健康に多大な影響を及ぼす保護因子になることも明らかにされている。

以上の観点から、施設養護の中で子どもが、施設職員など親以外の大人をアタッチメント対象として新たな関係を構築し、より安全なアタッチメント表象に修正していくことは、将来にわたって子どもの心身の発達に多大な影響を及ぼす重要な課題であり、施設養護の基盤をなす課題と言える。

2. 研究の目的

本研究では、アタッチメントの変化を追跡調査し、アタッチメントの再構築に寄与する要因について、施設ケアの現状に焦点を当て検討することを目的とする。具体的には、児童養護施設に継続して入所している児童を対象に、(1) アタッチメントの2年間の変化を調査し、(2) 変化に寄与すると考えられる施設ケアの背景要因（対人関係・生活状況・入所経緯など）、ならびに (3) 施設生活のアウトカムとしての児童のQOL、レジリエンス、行動問題、トラウマ性症状との関連を検討する。

なお、本研究は児童期が対象であるため、アタッチメントの査定は表象を分析に用いる Attachment Doll Play Assessment（George & Solomon, 1990, 1996, 2000）を使用する。

3. 研究の方法

(1) 研究協力者

第1次調査（Time1）と第2次調査（Time2）の2時点に於いて、継続して同じ児童養護施設に在籍し、研究協力の同意が得られた児童16名（男児5名・女児11名、Time1の平均年齢6.1歳、SD=0.9）、および協力児童の担当生活職員5名を対象とする。児童の平均施設在籍期間（Time2の4月1日現在）は4.9年（SD=1.47, 2.3年-7.3年）、平均入所時年齢は3.4歳（SD=1.62, 2.0-7.0）であった。調査は、異なる都道府県に所在する複数の施設の協力を得た。

(2) 調査内容と手続き

Time1、Time2の各時点の、調査対象別の調査内容を表1に示す。

表1 調査対象と調査内容

（調査対象）	第1次調査（Time1）	第2次調査（Time2）
児童	Attachment Doll Play Assessment (ADPA) 絵画愛情の関係テスト (PART)	Attachment Doll Play Assessment (ADPA) 絵画愛情の関係テスト (PART) 小学生版 QOL 尺度 (Kid-KINDL ^R) 子ども用トラウマ症状チェックリスト (TSCC-A)
担当職員	子どもの行動チェックリスト (CBCL/4-18)	子どもの行動チェックリスト (CBCL/4-18) レジリエンス尺度 (長尾, 2017) BG 調査 (谷向・赤澤・桂田, 2017)・聞き取り調査

- ① Attachment Doll Play Assessment (ADPA, George and Solomon, 1990-2016)：人形を使ってナラティブに表現されるアタッチメント表象からアタッチメント・タイプを査定する測定法。査定は有資格者が行い、結果は回避型 (A)、安定型 (B)、両価型 (C)、無秩序・混乱型 (D) に分類される (査定者間の信頼性 83.0%)。
- ② 絵画愛情の関係テスト (PART, Takahashi, 2002)：図版を用いて重要な他者と心理的機能を尋ねる測定具。PART の分類はオリジナル基準にあてはまらなかったため、新たに基準を設け、施設の先生型、家族型、友だち型、一匹狼型（「誰でもいい」「ひとり」「わからない」）、不特定型（偏りが無い）の5タイプに分類した。
- ③ 子どもの行動チェックリスト (Child Behavior Checklist/4-18, CBCL) (井瀬・上林・中田, 2001)：内在化・外在化問題など、子どもの問題行動を測定する尺度 (Achenbach, 1991) の日本版。
- ④ 小学生版 QOL 尺度 (Kid-KINDL^R, 根本, 2014)：子どもの心身の健康度を測る QOL 尺度。身体

的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友達、日常生活の6領域に関する全12項目(3件法)で構成されている。

- ⑤ 子ども用トラウマ症状チェックリスト(日本版 TSCC-A, 西澤, 2009): トラウマ性の体験に起因する精神的症状や心理的問題の把握を目的として標準化された尺度。全44項目(4件法)は臨床尺度(不安、抑うつ、怒り、心的外傷後ストレス、解離)と妥当性尺度を含む。
- ⑥ レジリエンス尺度(長尾, 2017): 保育者(教師)評定用のレジリエンス尺度で、「気質」(初めての活動や初めて会う人に対して肯定的・積極的な態度や行動)、「傷つきにくさ」(ストレスフルな出来事に遭遇した時にネガティブな態度にならない楽観性)、「自己調整」(適応的であるために要求される立ち直る力、やり遂げる力)の3因子、17項目(5件法)から構成されている。
- ⑦ バックグラウンド調査(BG調査): それぞれの児童のTime1からTime2までの生活状況、環境要因、入所背景などの把握を目的として作成した調査用紙で、①「児童の対人関係」: アタッチメント対象となりうる特定の大人との関係(例えば、担当職員、学習や遊びの個別ボランティア、施設心理士、学校の担任、里親など)、面会・外泊の頻度など家族との関係、施設や学校の友達関係、②「変化に寄与する出来事や生活状況」: 褒められたり自信をもつに至ったポジティブな出来事とストレスになるようなネガティブな出来事、③「入所に至る背景」: それぞれの子どもの入所理由、虐待やトラウマ性の体験の有無、入所年数など、以上の3点について回答を求めた。

(3) 調査の手続き

対児童の調査は、研究者が施設内の1室で個別に実施した。児童の負担を配慮し TSCC-A は施設心理士(研究協力者)が改めて実施した。対担当職員の調査は、調査用紙を個別の封筒に入れて職員にわたし、留置法で回収した。BG調査に基づく聞き取り調査は、回収した調査用紙を整理した後に、研究者と職員の談話形式で実施した。

(4) 倫理的配慮 本研究は関西福祉科学大学研究倫理審査を受け承認されている。

4. 研究成果

ここでは主要な結果を次の3点に絞って報告する。

(1) Attachment Doll Play Assessment からみたアタッチメント・タイプの変化

① 2年後のアタッチメント・タイプの変化

一次調査(Time1)から2年後の二次調査(Time2)にかけて、アタッチメント・タイプに変化がなかった児童は5名(31.3%)で、異なるタイプに変化した児童は11名(68.8%)であった。2時点の一致率は31.3%で、7割近い児童は変化したことになる。

変化の詳細は安定型(B)への変化が5名と多く、Time2で安定型は8名に増えた。またTime1で混乱型の5名は、全員がA・B・C型へ変化した。一方、Time2で新たに2名が混乱型と査定された。2年間に混乱型は5名から2名に減少し、安定型は4名から8名に増加した。なお、両時点を通して混乱型の児童はいなかった。

表2 2時点のアタッチメント・タイプ

		Time2				合計
		A	B	C	D	
Time1	A	1	1	1	1	4
	B	0	3	1	0	4
	C	0	1	1	1	3
	D	1	3	1	0	5
合計		2	8	4	2	16

② アタッチメントの移行(改善・変化なし・不安定化)

アタッチメント・タイプを、安定型(B)、不安定型(A/C)、混乱型(D)の3段階に分け、Time1からTime2の移行を分類した。「改善(DからA/C、B、A/CからB)」7名、「変化なし」6名、「不安定化(A/C、BからD、A/CからD)」3名であった。改善した児童が多かったのは、対象児童が継続して同じ施設で生活していたことが心身の安定化に寄与したためと考えられる。

(2) アタッチメントの変化に寄与する施設ケアの要因(BG調査)

① 施設での生活背景との関連

アタッチメントの変化に影響を及ぼすと考えられる要因を、BG調査の変数から検討した結果、「心理的ケアの有無」(「施設内心理療法」・「児童相談所等の外部相談機関への通院・通所」に該当)に連関がみられ、心理的ケアを受けた児童に「改善」が多く、受けていない児童に「不安定化」が多かった($\chi^2(5)=6.422, p<.05, f=.634$)。改善した8名の児童全員が、2年間に心理療法を受けていた。不安定化した3名は心理的ケアを受けていなかった。

表3 心理的ケアの有無とアタッチメントの移行

		改善	変化なし	不安定化	合計
		心理的ケア	なし	1	3
	あり	6	3	0	9
合計		7	6	3	16

「心理的ケア」の内容は施設内の心理療法（プレイセラピー）のほか、外部機関である児童相談所や医療機関（児童精神科）の心理面接や心理プログラム（TF-CBT等）への参加であった。

一方、施設担当職員・個別ボランティア・里親と、個別に関わる機会の有無に関しては、アタッチメントの変化と関連は見られなかった。また、家族との関係性や、外泊・面会の有無に関しても関連はみられなかった。

② アタッチメント・タイプの変化と生活背景 -職員への聞き取り調査から

アタッチメント・タイプの変化が顕著な児童の概要を以下に示す。これらの内容はBG調査と、それに基づいた職員への聞き取り調査から得られた情報で、個人が特定されないように配慮している。

<1. 混乱型から安定型に移行したケース>

虐待歴があり、愛着障害の診断があった児童。生活場面で核となる担当職員が、ポジティブな出来事は大切に共有し、辛いことは受けとめられるように支援した。学校の担任の先生とも良い関係を築き、PARTでも先生の名前が挙がるほど本児が頼りにする存在であった。また、3年に及ぶ施設心理面接を通して内省が深まり母への葛藤を表出し、自分の意見が言えるようになると共に、自他を区別し周囲のことを考えられるようになった。心理面接終盤には施設心理士と生い立ちを振り返る絵本を作成することができた。さらに、医療機関（児童精神科）を受診し、服薬と2カ月に1度の心理面接を受けた。

<2. 混乱型から安定型に移行したケース>

乳児院を経て施設に7年間在籍している児童。家庭生活の経験がなく、トラウマ性の体験もない。幼児期から関わりに対する反応が薄く、集団の中で見過ごされがちであったため、担当職員との関係を強めることを目的に意図的に関わる機会を増やす支援に方針を変更した。その結果、徐々に自分の意思を担当職員に伝えられるようになり、施設内の憧れの運動クラブに入ることを意思表示でき、クラブ担当の先生や年長児をモデルとしながら、クラブへの所属感も増していった。その他の生活職員や学習ボランティアの交代もなく安定した生活が維持された。また、施設心理面接、および外部医療機関の受診も継続し、心理面接では家族関係を扱い“家族は離れていても家族である”という思いに至った。

<3. 回避型から混乱型に移行したケース>

3歳から6年以上継続して入所している児童。トラウマ性の体験はない。入所時より人間関係を築く力が弱く、生活担当職員を頼りにするが関係は希薄で、核となる特定の職員がいないためその場しのぎの関係が多い。施設の支援方針も、まずは日常生活のケアに重点を置き、施設での日常の人間関係を大切にしたいという理由で、心理面接や学習ボランティア等の個別にかかわる取組は行っていない。母親との関係は入所時と比較すると改善したが、母の再婚相手の継父とは良好な関係とは言えない状態が続いている。

<4. 抵抗型から混乱型に移行したケース>

乳児院を経て施設に6年間継続して入所している児童。家庭生活の経験がなく、トラウマ性の体験はない。幼児期から人見知りが強く、双子のきょうだいの後をついて回ることが多かった。一人で決めることができず、決断はきょうだいや友達に依存的である。また、自ら大人に甘えることはなく、特別感のある大人との関係がない。生活上の問題行動が特になく、心理療法などの必要性は感じられず実施されていない。

これら変化が顕著なケースから、以下の共通点が挙げられる。

1. 特別な大人との関係性

安定化した児童の生活状況には“核となる”先生や職員、“特別感のある”大人の存在が明言されており、良い関係性を築いていた。例えば、ケース1では、担当職員との関係が良好な上に、児童にとって担任の先生がよい母親イメージを提供しており、さらに施設心理士とのセラピーで過去の葛藤を言語化し、生い立ちを振り返るまでに深まりを見せていた。ケース2では施設の支援方針として担当職員との関係を強化する一方、クラブへの所属が自分の居場所となり、クラブの先生が良き大人モデルとなっていた。

一方、不安定化したケース3と4では入所年数が比較的長いにもかかわらず、児童にとって“特別感のある”大人や“核となる生活職員”が明確に存在しているとは言えない状況であった。しかし、大人との関係が非常に悪いとか、全く大人を頼らない訳ではなく、それなりに集団生活に適応しているが、職員から問題視されることなく看過されている状態であったことが示唆された。

2. 児童の自己表明

もう1つの共通項は、児童の自己表明に関するものであった。例えば、安定化した児童は“自分の意見が言える”、“意思表示ができる”、不安定化した児童は“一人で決めることができない”ことが語られていた。児童期は自立への期待が高まり、行動や情動の自己調節が向上し、アタッチメント対象と目標修正的パートナーシップが芽生える時期である。アタッチメントの安定化・不安定化と、児童の意思表示や自己表明の程度は相乗的なものと考えられ、それぞれの児童の関係性エピソードから、自他を理解し協調しつつも困った時に先生を頼りにできる力（利用可能性）によって、職員からの関わりにも差が生じることが窺えた。

(3) アタッチメント、現在の生活状況と、入所前の虐待やトラウマ的体験との関連

入所前の乳幼児期に受けた種々の虐待やトラウマ性の体験と、アタッチメント、対人関係、QOL、精神的健康との関連を見たところ、アタッチメントの変化との関連はみられなかった。

しかし、虐待やトラウマ性の体験の有無は、学校生活におけるQOLや自尊感情、職員からみた子ども同士の関係と関連がみられ、虐待経験のない児童の方が学校適応は良く、子ども同士の関係も良かった。また、身体的虐待・ネグレクトを経験した児童は、トラウマ関連症状の不安や外傷後ストレスの得点が有意に高かった。

乳幼児期のトラウマ性の体験が児童期のアタッチメントに短絡的に影響を及ぼすのではなく、機能不全の家族環境、不安定なアタッチメント形成、虐待やトラウマ性の体験の蓄積が、発達精神病理学的に脆弱性を増長させてしまうと考えられた。

(4) まとめと課題

① 施設養護におけるアタッチメントの変化

本研究から施設入所の児童期のアタッチメントの可変性が示された。2年間で7割近い児童のアタッチメント・タイプが変化し、好転した児童が多いことは、安定した生活環境や人的環境を提供することによりアタッチメントはより安定的に再構築されることを意味する。同時に、児童期の施設入所児童のアタッチメントは脆弱性を含み、人的環境の影響を受けやすいことも示された。

アタッチメントの変化に寄与する要因として、施設ケアの中で“特別感のある大人”との関係の有無の影響が大きいことが明らかにされた。どの児童にも担当職員がいて、日々、ケアに務めているわけだが、不安定化した児童がいたことは、たとえ毎日、共に生活していても必ずしも担当職員がアタッチメント対象となるとは限らず、ある程度、関係が築けたとしても阻害されたアタッチメントを修復できるまでに至ることは難しいことが示された。

それでは子どもにとって“特別感のある存在”は何が違うのだろうか。在宅児童と違って安定な生活環境が保持されてこなかった施設の児童が、安定的・連続性のあるアタッチメントを形成するには、単に大人が個別に関わればよいというのではない。児童期のアタッチメント機能として Waters et al. (1991)は、“supervisory partnership”を挙げている。確実な避難所であり、安全基地でもあるアタッチメント対象が、必要な時に確実に利用できること、それは施設の児童の場合も大人が適切な距離にいて、子どもが何かを表明したら受けとめ、慰め、見守り、時に励まし、助言することと考えられる。改善した児童にとって核となる担当職員とは、この“supervisory partnership”の要素を充足していたと考えられる。また、アタッチメントが改善した児童の共通項である“自己表明”が向上することは、アタッチメント機能の促進につながると考えられる。感情表出が少なかったり、大きな問題行動がみられないような児童は見過ごされがちなので、そのような児童にこそ積極的に関わり自己表明力を育てる必要があると考えられた。

さらに、定期的に心理面接や心理プログラムを専門家から受けた児童に改善が多かったことから、日常生活での関わりとは別に、必要に応じて専門家が個別の心理的ケアを行う意義も大きいことが認められた。定期的に個別の心理療法を受けるということは、現在あるいは過去から持ち越している心理的危機に触れる作業を行うことである。心理職は子どもと信頼関係を築き、心理面接の中で様々な心理的危機に触れる作業を通して、子どもの気持ちに寄り添い、それを言葉にして内省力を養うメンタライジングの機能を果たす。これらの観点から、心理職は“supervisory partnership”を担い、心理療法はアタッチメントの再構築を支える機能があると考えられた。

② 今後の課題

本研究は、対象者数が少なく研究成果を一般化するには課題を残した。施設養護の児童のアタッチメント発達について全容を明らかにするためには、個別性を尊重する研究と共に、在宅児童との比較研究も必要と考えられる。より広範な研究の蓄積を通してこそ、施設入所児童のアタッチメント変化が著しかった結果への意味づけもより鮮明になるであろう。

社会的養護を要する子どもたちの多くにアタッチメントの問題があることから、その支援に繋がる課題に対して、今後も検討を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

1. Katsurada, E., Tanimukai, M. & Akazawa, J. A study of associations among attachment patterns, maltreatment, and behavior problem in institutionalized children in Japan. *Child Abuse & Neglect*, 70, 2017, 274-282.
2. 桂田恵美子, わが国の最近1年間における教育心理学の研究動向と展望 発達部門 (児童期まで) 乳幼児・児童期の研究動向—そこから見えてきたもの— *教育心理学年報*, 54, 2015, 1-15.

[学会発表] (計5件)

1. 谷向みつえ・桂田恵美子・赤澤淳子, 児童養護施設入所児童のアタッチメント表象の変化—特定の大人と個別に過す機会に着目して、日本心理学会、2018.

2. 谷向みつえ・桂田恵美子・赤澤淳子、施設入所児童のアタッチメント表象と愛情ネットワークの特徴 日本発達心理学会、2017
3. 谷向みつえ、絵画愛情関係テストから見た施設入所児童の対人関係、日本保育学会、2017
4. Mitsue Tanimukai, Emiko Katsurada, Junko Akazawa. Patterns of Affective Relationships among Institutionalized Children. 31st International Congress of Psychology 2016.
5. 谷向みつえ・桂田恵美子・赤澤淳子、Attachment Doll Play からみた D タイプの子どもの特徴 日本発達心理学会、2015

[その他]

1. 施設心理士研修会「アタッチメント表象のアセスメント」2018年10月.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：桂田 恵美子

ローマ字氏名：KATSURADA EMIKO

所属研究機関名：関西学院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号 (8桁)：90291989

研究分担者氏名：赤澤 淳子

ローマ字氏名：AKAZAWA JUNKO

所属研究機関名：福山大学

部局名：人間学部

職名：教授

研究者番号 (8桁)：90291880

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：明石 秀美

ローマ字氏名：AKASHI HIDE MI